2．平成14年度幼稚園教育研究集会旭川大会発表原稿

浜田　貴宏

金沢大学教育学部附属幼稚園の浜田と申します。よろしくお願いいたします。

はじめに、私たちはＴＴをどのように捉えているのかということからお話したいと思います。私たちは幼稚園における保育において、ＴＴという方法を用いることは極めて有効なものなのだと、捉えています。幼稚園には発達段階のそれぞれ違う幼児が多数存在しています。目の前の幼児一人一人に対して、育ちに応じたきめ細やかな配慮をしていきたいと願うとき、そこにＴＴの必然性が生じてきます。保育の現場は「今」が勝負です。その「今」には遊びに夢中になっている子もいれば、友達とトラブルを起こしている子、また、どうしていいのか分からずにただただ戸惑っている子など様々な状態の幼児が同時に存在しています。とても体一つでは足りないと感じたことのある人が多いのではないでしょうか。ここに、ＴＴの必然性が見えるのです。

それでは、この必然性あるＴＴには、一体どんな意義があるのでしょうか。私たちはこれまでの保育の積み重ねや日々の話し合いから、ＴＴには二つの意義があるのではないかと捉えています。一つ目は、幼児にとっていろいろな価値との出会いが保障されている、という点です。幼児らがＡ教師とかかわり、一緒になって遊び込むこと、Ｂ教師とかかわり、ちょっとしたアイデアを教えてもらうこと、Ｃ教師とかかわり、自分達の姿を十分に認めてもらうこと、こういったかかわりの中にそれぞれの先生との出会いや新しい価値との出会いが含み込まれています。一日の生活の中でこういったかかわりがあることによって、幼児らの生活ぶりはより充実し満足したものになっていくのではないでしょうか。二つ目は、教師にとって幼児一人一人を捉える力量が高まる、という点です。幼児のことについて複数の教師が話し合うことによって様々な視点が出され、それにより幼児理解が深まり、翌日からの保育に生かしていくことができます。教師同士が話し合うことで捉えに幅ができ、余裕をもったかかわりにつながります。そのことは結局、幼児の生活の安定につながっていくのではないでしょうか。

ここまで、ＴＴの必然性とその意義についての私たちなりの捉えをお話ししてきました。では、ＴＴにおける教師の役割とは、一体何なのでしょうか。ここをはっきりさせることがＴＴの工夫につながっていくと考えました。そこで、ＴＴにおける教師の役割を具体的な事例をもとに考察していくことにしました。

私たちの園では、幼児らが自発的に遊ぶ場とクラス全体での活動の場を一日の生活の流れの中に位置づけています。双方の場での経験が個人の中に畳み込まれ、他者とかかわることでより人間的に育つのではないかと考えているからです。

本提案ではこの二つの場のうち、クラス全体での活動の場に着目することにしました。その中でも、幼少連携の活動にスポットをあて、その事例を検証する中でＴＴにおける教師の役割を明らかにしていくことにしました。

私たちはこれまで、幼稚園の園舎と小学校の校舎がつながっているというハード面での特色を生かし、幼稚園の幼児らが小学校の様々な授業や活動に参加したり、逆に小学校の児童らが幼稚園に来て幼児らと一緒に活動したりといった「交流」を毎年積み重ねてきました。しかし、振り返ってみると、それらの活動は「交流」レベルに終始していた感が否めません。そこでの教師のあり方は、互いがゲストティーチャー的存在だったと言っていいと思います。私たちは

そこに何かしらの歯がゆさを感じていました。

そんな中、毎年の「交流」の積み重ねは、幼稚園教師と一部小学校教師の人間関係を育み、強めていました。

そこで、この背景を利用し、幼稚園、小学校という校種その他様々なしがらみを越えて、互いに腹を割って話し合い、試行錯誤しながらも、幼児及び児童の豊かな学びにつながる実践を目指すことにしました。その際、活動場所が幼稚園であれ小学校であれ、あるいは、幼稚園の活動であっても小学校の活動であっても、幼稚園教師と小学校教師がティームを組んで取り組むことにしたのです。

それでは、これから実践を通して見えてきたことをお話ししたいと思います。はじめは「アサガオを使った遊び」にかかわる二つの事例からです。お手元の資料には事例２及び事例３として載せてありますのでご覧下さい。

事例２「アサガオを使った遊び」

年長児にアサガオを使った遊びを教えてあげようと、附属小学校１年生２クラス約60名が幼稚園にやってきました。遊戯室に集まっている１年生の姿や「みんなおいで」という声かけで、保育室やテラスにいた年長児も集まってきました。

遊戯室には10以上の机が並んでいます。一つ一つの机では、６、７人の１年生が集まり、アサガオを使った遊びの準備をしています。

頃合いを見計らって１年生の担任Ｋ教師が「幼稚園のお友達に教えてあげてね」と声をかけますが、１年生の多くは専らまず自分達が楽しもうという感じで叩き染めや絞り染めなどに興じ始めました。年長児らはそのわいわいがやがや面白く楽しそうな様子をちょっぴり不安げながらも興味深そうに見入っています。その雰囲気を察してか、年中児の何人かもテラスの方から「一体何が始まるのだろう」といった感じで興味津々に様子を伺っています。

幼稚園Ｈ教師は年長児と１年生がいるグループに入り込み、アサガオの色水でクワガタの絵をかきました。子ども達は「おおー」「うまーい」「僕もかきたい」など、口々に話しています。その絵をヒントに自分で絵を描き始めた子ども達も出始めました。

そんな中、Ｃ児が

Ｃ児　「先生、わたしもやってみたい」

Ｈ教師の服を引っ張りながら小さな声で話しかけてきました。

Ｈ教師「１年生のお姉ちゃん達が教えてくれるよ。聞いてみたらどう？」

Ｃ児　「だけど・・・」

Ｈ教師の後ろに隠れるようにしながらも、１年生が叩き染めをする様子をじっと見ているＣ児でした。

Ｈ教師　「ねえＡさん、Ｃちゃんが叩き染めをしてみたいんだって。やり方教えてくれないかな」

１年生Ａ「うんいいよ。こっちにおいで。どうすればいいか教えてあげるよ」

１年生Ｂ「まずは、この紙を・・・」

Ｃ児は、１年生Ａ児やＢ児に優しく手を取られ、目の前でやり方を教えてもらっていました。

Ｃ児は、１年生が帰ったあと、クラスで牛乳を飲む前に「ほらっ」といいながら、自分の叩き染めをＨ教師に見せに来ました

考　察

幼稚園の遊戯室に１年生と年長児あわせて約100名、そこに教師が５名（小学校２名、幼稚園３名）という状況の下でのＴＴでした。活動のイニシアティブは小学校教師がとり、幼稚園教師は従的役割で活動を支えました。

１年生60名のパワーにはじめは圧倒されていた年長児でしたが、次第に場の雰囲気にも慣れ、自分の要求を小学生に伝えている幼児が多くなっていきました。そんな中、事例のようになかなか思いを伝えられない幼児もいました。そこで、教師が仲立ちとなり思いの橋渡しをすることで、やりたいことができました。Ｃ児に関して言えば、１年生が帰った後に、自分のつくった叩き染めを嬉しそうに教師に見せに来たことから、Ｃ児なりに満足できたことが伺えます。

また、10名前後のグループそれぞれに教師が入れ替わり立ち替わり入り込み、表現者としてかかわれたこともＴＴならではのことだと考えます。事例ではＨ教師の動きが述べられていますが、子ども達にとっては複数の教師とかかわり、いろいろなアイデアに触れることができたのではないでしょうか。

以上のことから、ＴＴでの、幼児に対する教師の役割として、①思いにより添う役割、②アイデアを提供する役割の二つが見えてきました。

続いて、事例３についてお話しします。この事例は、今ほど述べました事例２と同じ日の、３歳児クラスでのものです。

事例３「やりたい？」

１年生の男児数人が年長児とのかかわりに戸惑いを見せていました。その姿を見た幼稚園Ｉ教師が彼らに話しかけました。

Ｉ教師　「ねえ、あなた達、向こうにうさぎ組っていって、３歳の子ども達がいるんだけど、そこでこの色水遊び教えてあげてくれない？」

男児ら　「わかった。いってみる！」

Ｉ教師に促され、男児数人がペットボトル片手にうさぎ組保育室に向かいました。

１年生Ａ「色水つくりたい人！」

１年生Ｂ「こんな風に水をちょっとだけ入れて、あと、アサガオ入れて振るの」

１年生Ｃ「あんまり水を入れすぎるとだめだよ」

１年生Ａ「やりたい？」

集まってきたうさぎ組の幼児らに話しかけますが、幼児らはその１年生達と水の色が変わる様子に圧倒され、ぽかんと口を開けて見ているばかりでした。教師が少し離れて見ていると、同じように少し離れて見ていたＹ児が教師のそばに近づいてきました。１年生が怖いのかと思ってＹ児を見ると、嬉しそうな表情で１年生のすることを見ています。

Ｍ教師　「Ｙちゃんもやってみる？」

Ｙ児　「うん」

そこで、「この子もしてみたいんだって」といってＹ児を連れていくと、３人がかりで色水のつくり方を教えてくれました。

１年生Ａ「ペットボトル、持ってる？」

Ｙ児　「（首を横に振る）」

１年生Ｂ「じゃあ、これ（自分が持っているペットボトル）あげる。そしたら、ここに水を入れて、アサガオ入れて・・・」

Ｙ児は小学生のすることを嬉しそうに見ていました。そして、綺麗に色がついた水を見てますます嬉しそうな顔になりました。

１年生Ｂ「はい、これあげる。ペットボトルも家に持って帰っていいからね」

Ｙ児　　「(消え入りそうな声で）ありがとう」

もらったペットボトルをじっと見つめ、にっこり笑顔のＹ児でした。

Ｉ教師からうさぎ組に数人向かったことを聞いた小学校Ｋ教師は、遊戯室に戻ってくるよう伝えようと思っていました。しかし、一連のやりとりとその場の雰囲気、Ｉ教師からの「この子達、うさぎ組でしっかり教えていたわよ」という言葉で、考えを改めました。そして、「うさぎ組のお友達に教えたら戻っておいで」と伝え、遊戯室に戻っていきました。

考　察

遊戯室での活動に、今ひとつ馴染めず戸惑っていた数人の男児がＩ教師のかかわりによってうさぎ組に誘われ、そこで生き生きと活動し始めたのです。それは、積極的に３歳児に声をかける姿や、自分のペットボトルをあげるという姿から読み取ることができます。この時Ｉ教師は、１年生の男児数人が場の雰囲気に馴染めず、やりたいのにできない状況にあるのは、育ちに関係あるのではないかと捉えました。そしてこの子達が生きる場として、うさぎ組が適当ではないかと考えたのです。また、Ｋ教師にとっては、遊戯室で５歳児に教えて欲しいという思いがあり、呼び戻すつもりでうさぎ組に足を運んだのですが、その雰囲気やＩ教師からの「これでいいのよ」といった一言で、考えを改めました。

これらのことから、ＴＴでの、幼児に対する教師の役割として、思いを方向付ける役割があることが見えてきました。加えて教師同士がかかわり、子どもの見方についての捉えを伝えあうことで共に子ども理解を深めていくことの重要性も見えてきました。

次に、「バスごっこ」にかかわる一連の事例からお話ししたいと思います。お手元の資料の事例１、４、５、６、７、８、９が、バスごっこにかかわる事例ですが、本提案ではその中の事例７及び事例８を取り上げることにします。まずは、事例７からお話しします。

事例７「積み木貸してくれる？」

年長児がバスの乗り方を教えてもらえる前日、幼稚園Ｉ教師はわくわくしながら１年生のクラスに足を運びました。１年生がバスをつくることをＫ教師から聞いていたからです。

授業が始まり、Ｋ教師と共に１年生の子ども達が二つのグループに分かれてバスをつくり始めました。それぞれ自分達なりに考えながら座席やステップ、料金箱、入り口、出口などをつくっていましたが、年長児らにとって、「バスだ」と思えそうなものではありませんでした。

Ｉ教師　「なんだか、バスっぽくないわねえ」

Ｋ教師　「そうなんです。なにかこう、すっきりしないんですよねぇ」

Ｉ教師　「Ｋ先生、ちょっと、子ども達を集めてもいい？」

Ｋ教師　「はい、いいですよ」

Ｉ教師　「みんな、ちょっと集まってくれる・・・。これだったら、年長組にバスだってよくわからないかもしれない」

子ども達「・・・」

子ども達の間から「だって、なんにもないもん・・・」といったつぶやきが聞こえました。

Ｉ教師　「あなた達、バスをつくるときに、何か使いたいものある？」

１年生Ａ「段ボールがほしい」

Ｋ教師　「段ボールはちょっとしかないんだけど・・・。　先生あります？」

Ｉ教師　「幼稚園にいっぱいあるよ。使ってもいいよ」

子ども達の目が輝きだしました。

１年生Ｂ「先生！幼稚園の積み木ダメなの？貸してくれる？」

Ｉ教師　「いいよ。マルチパネっていうのもあるよ」

子ども達は、水を得た魚のように次から次へと要求を出してきました。幼稚園のものが使えるということがいっそうイメージを膨らませたようでしだ。

Ｉ教師　「Ｃちゃん、あなた積み木やマルチパネがどこにあるか知ってるでしょ。グループのみんなに教えてあげてね」

１年生Ｃ「わかった！よし、みんないこうぜ」

子ども達は生き生きとした表情で幼稚園に足を運び始めました。そして、使えそうな材料を調達し、グループで協力しあってバスをつくり上げました。

考　察

この事例は、幼稚園Ｉ教師と小学校Ｋ教師のＴＴが展開されている、１年生の授業の一こまです。Ｉ教師が１年生のクラスに足を運ぶと、授業の雰囲気は今ひとつ重たく、Ｋ教師も子ども達も悩んでいるようでした。加えて、子ども達のつくったバスは年長児の育ちに合っていないと思えました。さらに、年長児が１年生のクラスに入るとき、普段使い慣れたものがあったら、幼児らにとって少しでも親しみやすい場になるのではないかと考えました。そこで、Ｋ教師と一緒に授業をつくっていきました。

Ｉ教師がかかわることで状況は一変しました。Ｉ教師の存在や発する言葉から１年生が幼稚園教師の背後に「もの」を見たのです。幼稚園にあるものをふんだんに使ってもいいんだという思いが、やる気を引き起こしたといってもいいでしょう。子ども達は使いたいものをどんどん要求し、勢いよく調達に向かいました。そして、バスをつくりながらさらに必要なものに気付き、イメージを具現化していったのです。

ここでのＴＴでは、幼児に対する教師の役割として、①状況を変える役割、②アイデアを提供する役割の二つが見えてきました。幼稚園教師が授業にかかわり、主の役割をしたことで状況が一変したのです。また、１年生担任教師と共に、考えたり指示したりできたのは、教師同士が互いにその存在を尊重し、よりよい活動に向けて行動したからに他なりません。ＴＴでは、場に対等に存在していることが大切だと言うことが見えてきました。

続いて、事例８をＶＴＲでご覧頂きます。５歳児がはにかみながらも緊張した面もちで１年生の教室に入ってくる様子、まずは幼児らがバスに乗ってみる様子、１年生にバスの乗り方について教えてもらっている様子、そして、今度は１年生と一緒にバスに乗り込む様子、楽しかったことを全身で表しながら保育室に戻っていく様子が映し出されます。その中で小学校Ｋ教師と幼稚園Ｔ教師が互いの存在を尊重しながら状況に応じて臨機応変にＴＴをしている様子が

伺えます。逆行やブレで見にくい部分もありますがご了承下さい。

～ＶＴＲ～

バスごっこの授業前に教師同士が話し合ったことは、授業の流れの確認と、その際、板書をＴ教師がすること、全体の場では１年生に対してはＫ教師、園児に対してはＴ教師が主として声をかけますが、状況に応じながら臨機応変に対応していこうということでした。ＶＴＲをご覧のように幼稚園及び小学校双方の子ども達の主体的で楽しい活動ぶりにつながっていったのではないでしょうか。それは特に、１年生がバスの乗り方を説明しているときの幼児らの表情や幼稚園と小学校の子ども達が一緒にバスに乗り込んだときの表情から伺うことができます。

この事例でのＴＴでは、事前の打ち合わせはもちろんのこと、日頃の、子ども達に思いを馳せた、育ちや様子の情報交換、それによる子ども理解の深まり、そこで培われた信頼関係が、ＴＴであうんの呼吸として表れ、それが、子ども達の充実した生活へと結びついていく、ということが見えてきました。

以上、アサガオを使った遊びとバスごっこの事例から見えてきたことをお話ししてきましたが、まとめると幼児に対する教師の役割としては

・思いにより添う役割
・思いを方向付ける役割
・状況を変える役割
・いろいろなアイデアを提供する役割

の４つが見えてきました。

また、クラス全体での活動におけるＴＴでは、活動するに当たって、主的役割の教師と従的役割の教師が存在します。しかし、活動に対しての心構えとしては共に主体的かつ対等であることが重要であり、そうであるからこそ状況に応じて臨機応変に主と従の役割が入れ替えられることが見えてきました。とりわけ、今回のように異校種の場合はついつい遠慮がちになりがちですが、そこを打破し、腹を割って話し合い、実際に活動することが重要で、そのことが子ども達のよりよい経験につながったと思います。

さらに、今回クラス全体での活動に着目して事例を考察してきましたが、ここで見えてきたことは幼児の自発的な遊びの場においても言えるということを日頃の実践から確認しています。どちらの場も一人一人の幼児の思いが出発点なのです。

今後も、実践の中で見いだした４つの教師の役割を意識しながら、毎日の保育を展開していきたいと思っています。そのことによって、互いの幼児理解が深まり、保育が豊かになっていくと考えます。

これで、提案を終わります。このあと、皆様の忌憚のないご意見をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。